

三陸の海を放射能から守る

岩手の会

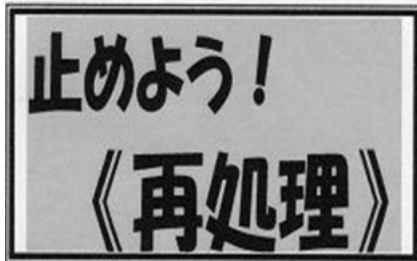
郵便振替 02240-5-102650

《再処理 / 岩手の環境》

http://homepage3.nifty.com/gatayann/env.htm

《まった再処理分庫》

http://briefcase.yahoo.co.jp/k_i_mag



《天恵の海》

2010(平成22)年

4月 9日

第96号

編集事務局 S.Oshida

TEL・FAX 019-623-1636

「明治29年」を上回る大津波 地震活動期にある日本列島

計り知れない大自然の力

「三月一日東北地方の太平洋沿岸を襲った大津波は、一八九六(明治二九)年の大津波より大きかった」と思われます。盛岡中心の「岩手の会」から、沿岸で活動している「豊かな三陸の海を守る会」の被災者を慰問するために会員が駆けつけました。回れたのは宮古、山田が中心でしたが、破壊され、がれきの山と化した惨状は、連日テレビや新聞で報道されている通りです。

岩手の沿岸では「明治二九年の津波」は、もうこれ以上の大津波はないだろうと語り継がれて来ましたが、しかし、実際にはそれ以上だったのです。今回の津波について、「豊かな三陸の海を守る会」会員から、想像を絶する津波の威力を取材しました。



「あの山田線の土手を越えて津波が押し寄せ、家や船を運んできた・・・町を襲った津波の大きさを説明する豊かな三陸の海を守る会の
田村剛一会長

津波は我が家を超えた

「豊かな三陸の海を守る会」会長の田村剛一さんは高校の地理の先生で、いつも津波の話の教材にしていました。「明治二九年には大丈夫だった我が家」にまで津波が来るようだったから山田町全体がダメさ」と話していました。しかしそれ以上の津波が来たと驚愕していました。



手前の土台の家があんなところに！
山田町大浦港

津波が貫通する
船越半島の付け根

山田中学校の理科の先生だった岩間滋さんは山田町大浦地区に家族で住んだことがあり、その家に行ってみました。明治二九年の津波では安全だったというその家は一階の一部が破壊され、その下の、家族ぐるみでつきあっていたお隣の家は土台を残して四、五〇センチも流れ、二階部分だけが



巨大な津波がすべてを呑み込んだ
山田町小谷鳥港

形跡をとどめていました。この大浦地区から谷を通して外洋側にあるのが小谷鳥(こやどり)集落。行ってみると十数メートル以上の大津波が海から谷奥へ一気に駆け上がったことが歴然としていました。港や集落は跡形もなく、岩間先生の娘の同級生の母子四人もさらわれ行方不明という悲報を聞きましました。

辛くも無事

実は編集子大信田の妻の実家が船渡市三陸町越喜来(おっきらい)。家は海拔二五メートルのところにあります。今回の津波では、かろうじて我が家は無事。お隣の、眺めの良い民宿がやられました。もちろん「明治二九年の津波」では安全だった場所です。



海拔二五メートルの津波。無事な家と破壊された家。
大船渡市三陸町越喜来

大地震に対して再処理・原発施設は安全か？

あらゆる知見を集めて安全対策を！



「六ヶ所再処理工場の丘のたわみは地下に逆断層の存在を示し、M8レベルの地震もあり得る。」
東洋大学 渡辺満久教授（変動地形状学）
2008年6月 現地説明会
（本紙第55号参照）

核燃料のたまり場、六ヶ所工場

六ヶ所再処理工場には約二四〇立方メートルの高レベル放射性廃液がタンクに貯蔵されています。これは電源喪失事故が起こると発生後十五時間で沸騰が始まり、場合によっては水素爆発や析出した硝酸塩の爆発を起こす超危険な廃液であり、そのためガラス固化しなければなりません。今回の地震では「非常電源」に切り替わり事なきを得たとされます。同じ高レベル放射性廃液は茨城県東海再処理工場にも貯蔵されています。

直下逆断層説の新知見を退ける
二〇〇八年六月東洋大学の渡辺満久教授らが変動地形状学の立場から「六ヶ所再処理工場直下に逆断層があり大地震の恐れがある」として耐震性に否定的な批判を行いました。（本紙五五号）しかし、残念ながら原子力安全委員会は昨年十二月、新知見ではない。安全である」として、渡辺教授らの見解を退けました。

東海大地震に備え浜岡原発停止を

静岡県駿河湾にはフィリピン海プレートという海底の地殻が日本列島の地殻とせめぎ合っておりこのプレートが動くとき大地震が発生すると言

われています。このメカニズムで引き起こされた地震としては大きなものでは一八五四年の安政の大地震と一九二三年の関東大震災があります。これらの地震を分析して、地震学者の多くが東海地震は迫っているのではないかとこの説を唱えています。

三万キロワットの二機が稼働中で、今も稼働しています。連続して大地震が発生する可能性もあるのですから驚くべきことです。福島原発は大津波に襲われたからでしたが、浜岡の場合は直下型の大地震です。制御棒が入らず、タービン建屋と原子炉との継ぎ目あたりから漏水が始まる恐れもあると指摘されています。万一の場合には福島でさえ手一杯なのに大変なことになると思います。いずれ浜岡原発と伊方原発は地震に弱い「構造線」上に位置しており、地震活動期の今は、停止し、炉心の核燃料は抜き取るか冷却しておくべきです。今回の事故を検証し、徹底した安全対策が施されるまでは操業を停止するべきです。

日本列島は今、活発な地震活動期。「日本における現代地震学の成立は一九六〇年代後半である。それに対して、日本の原子力政策は一九五〇年代に始まり、一九七〇年代に原発建設ラッシュとなった。そして、当時の日本列島は地震の静穏期。ところが今、日本列島は活発な地震活動期に入った。原発ラッシュ時に耐震強度が低く見積もられ、しかも老朽化した原発や核施設は、原発震災という大問題に遭遇するだろう。」

石橋克彦神戸大学名誉教授

（地震学）

二〇〇八年二月

青森市での市民シンポジウムにて
（本紙第六六号参照）

さらに六ヶ所再処理工場には再処理を前提に全国の原発から使用済み核燃料が続々と運び込まれています。昨年十二月で収容能力三〇〇〇トンのプールに二八二七トン保管されています。この使用済み核燃料も冷却能力を喪失しされ、何らの措置もな



静岡県 浜岡原発

問題は、この東海大地震の震源域に中部電力浜岡原発があり被災の恐れがあることです。驚いたことに浜岡原発はこの東日本大震災中も、四号機、一三万キロワットと五号機（一

火力発電所は充分ある。中部電力の火力発電の能力は二二九〇万キロワットもあります。常時稼働率はせいぜい五〇〜六〇％ですから浜岡原発なしでも充分間に合います。国民も節電には協力します。地震列島日本において放射能の危険のない安心安全なエネルギー政策に方向転換させるべきです。